

『きゅうりの乗り物』 作…ポチ子

陽菜 「おばあちゃん、元気にしてる？」

涼介 「おう、今日も昼にステーキ食べてた。今は食い終わって、寝てる。」

陽菜 「ふふ、すごいね、欲望に忠実って感じ。」

涼介 「あと20年は生きるな、あれは。」

陽菜 「そうになったら、日本最長寿になっちゃうね。お祝いは何がいいかなあ。」

涼介 「ステーキでいいんじゃないか。」

陽菜 「ちよつとー、適当だなあ。最長寿だよ？もっと派手にお祝いしようよ。」

涼介 「20年もあんだから、今から考えなくてもいいだろ。」

陽菜 「ちえっ冷たいなー。そんなんだから、モテないのよ。もうちよつと乗ってきてくれてもいいのに。．．．そういえば、お盆にステーキって食べていいのかな。」

涼介 「いいんじゃないね。葬式じゃないし。」

陽菜 「確かにそうか。でもなんとなくお盆って漬物とかきゅうりとか食べるイメージない？」

涼介 「きゅうりは飾るもんだろ。」

陽菜 「そうだったっけ？・・・あーあ、私もステーキ食べたいな

あ。最後に食べたの、いつだろう。」

涼介 「少なくとも、4年は前だな。」

陽菜 「だよねえ・・・4年か、早いな。6歳の子が10歳になっ
ちゃう。」

涼介 「なんだよ、その微妙な例え。」

陽菜 「ええ？じゃあ、なんていえばいいのよ。」

涼介 「せめて、高校生が大学生になるとか。いろいろあんだろ。
年齢で言われても当たり前前すぎて、ピンと来ないっつーの。」

陽菜 「なんか、涼介、頭良くなったね。」

涼介 「お前がアホのまんまなだけだろ。」

陽菜 「昔は私とおんなじくらいだったのにな。頭のよさも、身長
も。」

涼介 「それ、小学生くらいの話だろ。高校の時にはもう身長越し
たし。」

陽菜 「ええ、嘘。ちっちゃかったよ。記憶盛ってんじゃない？」

涼介 「盛ってねえ。」

陽菜 「私、涼介が高校1年生の時、身体測定で背伸びしてたの知
ってるんだから。」

涼介 「うるせえ。いつまでその話すんだよ。」

陽菜 「だってめちゃくちや面白かったんだもん。背伸びするのも

ダサイし、その後先生に怒られたのもめちゃめちゃダサくてさ。あれは一生語り継げるね。涼介のお母さんにもその日のうちにチクってあげたもん。」

涼介 「まじであれば一生恨んでやるからな。」

陽菜 「ははは、無駄な見栄を張るからそうなんのよ。ざまーみろ。」

涼介 「お前、ほんと最悪。」

陽菜 「ふふふ。はー・・・もう、こんな時間かあ。」

涼介 「おう。」

陽菜 「そろそろ、帰らないと。」

涼介 「・・・おう。」

陽菜 「時間ってあつという間だよ。続けばいいって思うほど、早く過ぎてっちゃう。」

陽菜、腕を伸ばす。

陽菜 「うーん、今年も笑ったなあ。涼介のおばあちゃんとお母さんにもよろしく言っというてね。」

涼介 「うん、言っとく。」

陽菜 「んじゃ、また来年。忘れちゃだめだよ。」

涼介 「忘れねーよ。」

陽菜 「ふふ、またね。」

涼介 「おう、またな。」

玄関の扉が開く音。

涼介の母が帰宅する

母 「ただいまー。なに、お友達家につれて・・・あれ、今あんた誰かと話してなかった？」

涼介 「いや。」

母 「そう。あんた何でもいいって言うから、オードブルと刺身買ってきたんだけど、これでいいわよね。飲み物もコーラでもいいでしょ？」

涼介 「うん。」

母 「おばあちゃんは？」

涼介 「寝てる。」

母 「涼介、あんた、お腹すいた？」

涼介 「普通。」

母 「んじゃ、冷蔵庫にしまつとくから。お母さん、またちよつと出かけてくるから、お腹すいたら先食べていいからね。」

涼介 「ん。」

母 「じゃあ、行ってくるから。玄関のカギ閉めといてね。」

涼介 「うん。行ってらっしゃい。」

— 終わり —